

森 義則 (中学校課程・保健体育専攻)

<序論>動機・目的・方法

本研究では、サイドプレイヤーの運動を質的な側面からとらえ、評価していく方法を模索しようとしたものである。1997年男子世界ハンドボール選手権大会(熊本)におけるスウェーデンチームのトールソン、ピエッレ(THORSONN, Pierre)のサイドシュートをビデオに収録し、運動学的視点からの事例研究として、有効な質的評価方法を明らかにしていくものである。

<本論>第1章 ハンドボール競技の特性

ハンドボール競技の特徴は、ゲーム経過につれてたえず局面が入れ替わるところにある。ハンドボールにおけるゲームの局面構造は、攻撃と防御ともに、第1局面、第2局面、第3局面にわけられる。

また、集団戦術はゲームを構想する際に重要となり、個人の人格的な特質と競技力をふまえなければならない。集団戦術の基本方針として、チーム戦術、グループ戦術、個人戦術がある。

第2章 ハンドボール競技における試合分析の方法論

運動を質的に明らかにしていく際に不可欠なものとして「印象分析」がある。これは目の前で行われていく運動を「直観」においてありのままに記述していく方法である。しかしそれには、その運動の豊富な運動経験や、運動を見抜く力、そして運動共感の能力が必要である。運動行為を質的に明らかにするために、マイネルによって規定された8つの諸カテゴリーを用いて、客観的に観察することができる。

- ①運動の局面構造 ②運動のリズム ③運動の伝導 ④運動の流動  
⑤運動の弾性 ⑥運動の先取り ⑦運動の正確さ ⑧運動の調和

これらは、それぞれ独立しているものではなく、互いに有機的に絡み合っており、1つの「運動微表」として存在している。また、映像機器による観察などを行なうことにより、科学的にも客観性のある分析を行なうことが必

要であるといえる。

第3章 試合分析におけるプレイヤー観察の実際

プレイヤー観察にも、数量的な観察と、質的な観察があるが、本研究では質的な観察に焦点を絞って行なった。そして、マイネルの諸カテゴリーの中から「運動の局面構造」と「運動の先取り」を特に重視して取り扱った。事例として、男子世界ハンドボール選手権におけるトールソン選手のセットオフェンス時のサイドシュートに着目し、典型的なものを分析した。その分析の結果、トールソン選手は、コーナーの位置取りからのシュートを得意としていることがわかった。また、個人によって得意とするシュートパターンには違いがあり、シュートにおける「個人戦術」を考えたときに、戦術のバリエーションを多く持ち、選択できる幅が広いことなど、自分の得意な「個人戦術」だけでなく、多様な戦術を身に付けることが重要であることもわかった。

<結論>

球技種目一般にスコアシートなどを用いた数量的な記録・評価は現在定着しているといえる。しかし、それは「何故そのような数量的な結果になったのか」ということはわからないのである。そこで本研究では、マイネルのカテゴリーを用いることにより、運動学的視点から運動の質を事例に基づいて研究した。印象分析に対して、諸カテゴリーを用いて考察することにより、科学的にも客観性のある分析ができるものであり、有効な質的分析ができるものであるといえる。運動経験(主観)を土台としたなかに、理論(客観)的な視点から運動を分析し、運動を模索していくことは重要である。質的な分析が定着し、広く行われるようになることは、ハンドボールそのものを高いレベルに上げていくことにつながり、また質的分析に基づいた観察が必要であると考えられる。

—主要文献—

1. ヒューマンスポーツ研究会編: HUMAN SUPPORT SCIENCE, 中央法規出版, 1991
2. Meinel, K. 著, 金子明友訳: マイネルスポーツ運動学, 大修館書店, 1981
3. Stiehler, G. Konzag, I. Döbler, H. 著, 唐木国彦 監修: ポールゲーム指導事典, 大修館書店, 1993